



シラネアオイの植栽

地域・社会への責任

総合バイオマス企業として新たな製品を創出し、
事業を拡大していく日本製紙グループは、
広大な森林を育成・管理し、大規模な生産拠点を持つことから、
その地域と働く人たちに大きな影響力があります。
地域との共生は、当社グループの持続性にとって不可欠です。

※統合報告書2020 P76もご参照ください。

重要課題	関連指標	取り組み状況（2019 年度）
地域・社会との共生	地域・社会から信頼を得るコミュニケーションの実施	学校や町内会など地域団体の工場見学の受け入れ、イベント共催などによる地域との交流など
	ステークホルダーからの評価	活動に関わったステークホルダーの皆さまから意見・評価を収集（アンケートの実施など）

地域・社会への責任

方針とマネジメント

地域の方々に信頼され、親しまれる企業であるために、各地でさまざまな社会貢献活動を続けています

I 基本的な考え方

日本製紙グループは社会の一員として社会全体の発展に貢献したいと考えています。必要とされる製品の供給を続けるとともに、地球環境の保護、文化や地域社会の発展にも役立ちたい——そのための活動を積み重ねていくことが、社会から信頼を得て、地域と共生しながら事業活動を続けていくことにつながります。

国内外でのさまざまな取り組みは、工場周辺の清掃活動、植林地域での就業支援など地域に根ざした活動や、社有林を活用した「森と紙のなかよし学校」の開催、工場見学など、グループの資源を活かした活動にも及びます。

社会貢献活動の理念と基本方針

(2004年4月1日制定)

■ 理念

私たちは社会の一員として、誇りを持って社会全体の発展に貢献する活動を行います。

■ 基本方針

- 1.文化の継承・発展に寄与する活動を行います
- 2.地球環境の保護・改善に貢献する活動を行います
- 3.地域社会の発展に役立つ活動を行います

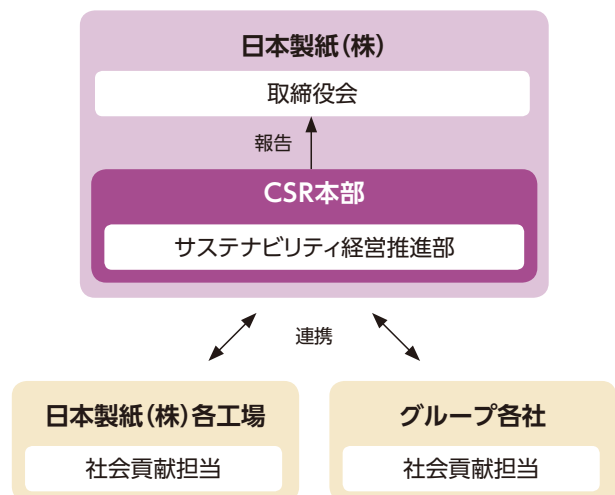
具体的な活動テーマ

- グループ各社の工場および海外現地法人における地域活動の充実
- グループの専門性や資源を活かした活動の推進
- 従業員が主体となって取り組む社会貢献活動の推進
- 日本国内の社有林(約9万ヘクタール)の有効活用
- 社内外への積極的な広報活動

I 社会貢献活動の推進体制

日本製紙グループとしての社会貢献活動は、日本製紙(株)CSR本部が事務局となって推進しています。国内社有林に関連する活動が中心で、例えば、「森と紙のなかよし学校」や「シラネアオイを守る会」への社員ボランティアの参加、(公財)日本野鳥の会との共同調査および西表島での外来植物駆除活動などは、CSR本部が事務局として毎年の活動計画を管理しています。また、2019年秋から日本製紙(株)の本社オフィスでの使用済み紙コップ回収リサイクルを開始するなど、新規活動の検討・実施も担当しています。

日本製紙(株)の工場およびグループ各社においては、社会貢献活動の担当者がそれぞれの地域に根差した活動を継続して実施しています。CSR本部は、工場・グループ会社と連携し、各活動状況を把握するとともに、社会貢献活動の実施状況を日本製紙(株)の取締役会に報告しています。



日本製紙グループの主要な社会貢献活動

主な取り組み	具体例	記載ページ
地域・社会に関する活動		
地域美化活動	旭山動物園での「ありがとう大作戦」	—
地域の安全・防災	子ども110番パトロール事業	—
	交通安全の意識喚起	70
	消防団への参加	—
地域文化の保全	飛鳥山薪能の運営支援	—
先住民族への配慮	先住民族へのハーブ自生地開放*	—
	先住民遺跡の保護*	84
	先住民族の遺跡がある土地を恒久的な保護区に指定*	84
	先住民地区に資材を寄付*	84
地域イベントの開催・参加	お祭りなど地域行事への参加・協賛	—
	所有する厚生施設(体育館など)の一般への開放	—
	夏祭りなどイベントの開催	—
福祉活動	ピンクリボン運動を支援するコピー用紙の販売	—
	社会福祉団体のイベントへの参加・協賛	—
意識啓発の機会提供	CSR講演会	24
科学技術の振興	藤原科学財団への支援	85
災害時の支援活動	義援金や医療現場への支援	12
環境に関する活動		
社有林の活用	「丸沼高原 植樹2019」を開催	83
生物多様性の保全	シマフクロウの生息地保全と事業の両立	54
	人工巣箱設置によるシマフクロウの繁殖条件改善	85
	「シラネアオイを守る会」の活動支援	55
	西表島で外来植物の駆除活動	55
リサイクル活動の推進	「リサイクルプラザ紙遊館」の運営	—
	紙パック回収リサイクル	52
地域への説明責任	環境コミュニケーション	42
教育に関する活動		
社会見学の機会の提供	地域中学校職場体験の受け入れ	—
社有林の活用	「森と紙のなかよし学校」を開催	83
就業支援	インターンシップ、職場体験の受け入れ*	—
	地域の人々の要望に沿った講習会の開催*	85
従業員による授業	出前授業、学校授業への協力	—
音楽を通じた教育機会の提供	札幌ポップスコンサートへの児童・生徒ご招待	86
スポーツを通じた教育機会の提供	福知山マラソン協賛	—
	低所得層の子どもたちを対象にしたスポーツ教室を支援*	86
教育現場への製品提供	教育機関への紙・印刷物の提供	—

※海外での活動

→ 日本製紙グループの主要な社会貢献活動

<https://www.nipponpapergroup.com/csr/society/activity/>

社有林の活用

事例 「森と紙のなかよし学校」を開催※1(日本製紙(株)、日本製紙総合開発(株))



スタッフの説明に聞き入るこどもたち

「森と紙のなかよし学校」は日本製紙(株)の国内社有林(約9万ヘクタール)を活用した、日本製紙グループ独自の自然環境教室です。社有林の豊かな自然に触れ、「森」と生活になくてはならない「紙」とのつながりを体験してもらう機会の提供を目的として、2006年10月に群馬県の菅沼社有林(丸沼高原)でスタートしました。

「森と紙のなかよし学校」は、プログラム全体を従業員知識と経験を活かして企画・運営しています。グループ従業員のガイドによる森林ハイキングや、森で拾ってきた小枝を材料にした紙づくりなど、参加者

が楽しめるように趣向を凝らしています。保護者からは「森林と親しむ非常に良い機会となった」等の感想もいただいています。参加者は一般から公募しており、募集や当日の引率などで(公社)日本フィランソロピー協会の協力をいただいています。菅沼社有林ではスタートから2019年度まで24回、一般親子、地元の高校生など計800人が参加しました。

また、2018年度、2019年度はFSC®フォレストウィーク※2のイベントとして共催・参加し、森林認証などについても学ぶ機会を持ちました。

※2 FSCライセンス番号:FSC®-C001751



子どもたちからの絵日記



参加者全員で記念撮影

➡ 森と紙のなかよし学校 <https://www.nipponpapergroup.com/morikami/>

事例 「丸沼高原 植樹2019」を開催※1(日本製紙(株))

日本製紙(株)は、豊かな森林を未来に残していくための取り組みを進めています。その一環として2010年5月から群馬県の菅沼社有林で植樹活動を行っており、2019年度は8回目となる「丸沼高原 植樹2019」を開催し、日本製紙グループ内外から約90人が参加しました。



参加者による植樹

※1 2020年度は、新型コロナウイルスの影響により中止としましたが、今後も引き続き社有林を活用した社会貢献活動に取り組めます。

先住民族への配慮

事例 先住民遺跡の保護(オーストラリア NPR社)

NPR社(ニッポン・ペーパー・リソーシズ・オーストラリア)が管理する豪州植林プロジェクトのひとつであるPTP植林地内で、2016年にアボリジニ関連の古い石器が発見されました。専門家による現地調査を実施し、該当エリアは2017年にアボリジニ関係遺跡として登録され、2018年には遺跡を保護するために無断立ち入り禁止の標識を設置しました。また、該当植林地の今後の伐採に向け、文化遺跡管理計画の策定を

行う予定です。今後も地元のアボリジニ関連団体との対話を継続するとともに、遺跡の現状維持に協力していきます。



発見された石器



遺跡を保護するための標識

事例 先住民族の遺跡がある土地を恒久的な保護区に指定(ブラジル アムセル社)

アムセル社所有地内約1.6万ヘクタールにおいて、2013年8月から2014年1月に遺跡発掘調査を実施した結果、21の考古学的遺物が発見、収集されました。アムセルでは、該当する全区域を恒久的な保護区域とし、行政・研究機関と連携して遺跡の保全に努めています。

また、タウタウガウジーニョ市内の学校で遺産教育講演会を開催するなどの教育活動も行っています。



設置された遺跡の看板



遺産教育講演会

事例 先住民地区に資材を寄付(チリ ヴォルテラ社)

地域の先住民社会プロジェクトに参加し、社有植林地に隣接する先住民地区の劣化が進む下水タンクとパイプを更新するために、それぞれを寄付しました。また、先住民地区の道路舗装化・拡張プロジェクトに参加し、フェンス材の提供、設置を行いました。これらの活動は、先住民地区の生活環境の改善に直接つながるものです。このような活動や対話を通じ、先住民

地区で暮らす人々との関係性、相互理解をより一層深めていきます。



寄付をしたタンクとパイプ



設置したフェンス

科学技術の振興

事例 藤原科学財団への支援(日本製紙(株))

(公財)藤原科学財団の「藤原賞」は、日本のノーベル賞ともいわれ、科学技術の発展に卓越した貢献をした日本の科学者を顕彰する学術賞です。創設者の藤原銀次郎氏が日本の科学技術の振興に貢献してきた精神を受け継ぎ、日本製紙(株)は財政的な支援を続けています。

「第61回藤原賞」では、2020年8月、東京工業大学 栄誉教授兼基礎研究機構特命教授 鈴木啓介氏および東京大学大学院医学研究科教授 水島昇氏に、賞状とメダル、副賞の1,000万円が贈られました。

生物多様性の保全

事例 人工巣箱設置によるシマフクロウの繁殖条件改善～ (公財)日本野鳥の会との協働(日本製紙(株))

日本製紙(株)は、2010年以降、北海道の社有林において、シマフクロウの生息地の保全と事業の両立に取り組んでいます。さらに、2020年に日本野鳥の会と協働で、北海道の社有林内に人工巣箱を複数設置しシマフクロウの繁殖を助ける活動を行います。(→ P.54)

シマフクロウは、日本では北海道および北方領土に生息する、世界最大級のフクロウです。20世紀初頭までは、北海道全域に分布していましたが、森林伐採に

よる営巣木の減少と河川改修や砂防ダム建設による餌の魚類の減少などにより、現在は、絶滅のおそれが最も高い絶滅危惧IA類に指定されています。

シマフクロウが生息していくためには、豊富なえさやすみかに適した大木など豊かな自然が必要です。生物多様性のシンボルともいえるシマフクロウと、その生息に適した豊かな森を守るための取り組みを、今後も進めていきます。

就業支援

事例 地域の人々の要望に沿った講習会の開催(ブラジル アムセル社)

アムセル社は、植林地をはじめとする広大な土地を保有しており、地域に住む人々との協調、対話の深化に努めています。その一環として、地域の人々から就業や生活のために学びたいことを聞き取り、それらに沿ったテーマで講習会を継続的に開いています。

2019年度はサンタナ、フェヘイラゴメス、タウタウガウジーニョ、イタウバルの4地域で、「情報処理」および「裁縫」をテーマとし、アムセル社が招聘した専門家

による講習会を開催しました。講習会は4～15日間の内容で、360人以上が参加し、好評を博しました。



講習会の様子



音楽を通じた教育機会の提供

事例 札幌ポップスコンサートへの児童・生徒ご招待(日本製紙(株)、日本製紙クレシア(株))

日本製紙(株)は札幌コンサートホールKitaraで開催された「日本製紙クリネックス®Presents 札幌ポップスコンサートVol.17」に地域の小中高生や音楽関係者、胆振東部地震で被害に遭われた方等、約450人を特別招待しました。このコンサートは、北海道唯一のプロ・オーケストラである公益財団法人札幌交響楽団と株式会社北海道新聞社等が共催し、北海道の文化芸術を支

援する目的で日本製紙が特別協賛、日本製紙クレシアが製品協賛しています。17回目の今回は、第1部で月面着陸50周年を記念し、月や星にちなんだ名曲の数々が演奏されました。第2部では、芸能生活55周年の五木ひろしさんが、自身で作曲した曲や新曲を披露し、会場の皆さんを魅了しました。

スポーツを通じた教育機会の提供

事例 低所得層の子供たちを対象にしたスポーツ教室を支援(ブラジル アムセル社)

アムセル社は、地域の子どもたちを対象としたスポーツ教室に対する支援を行っています。2019年度は、“Judô”(柔道教室)、“Peixinhos Voadores”(水泳教室)が開催され、約100人がこのプログラムに参加しました。

この活動はアマパ州軍警察環境部隊によって行われ、スポーツ教室を通じて低所得地域の子どもたちの健全な育成を促し、薬物乱用や犯罪に巻き込まれないようにすることを目指しています。アムセル社は毎年柔道着やマット、浮き輪などの資材を提供し、この取り組みに対するサポートを続けています。



柔道教室



水泳教室